シリーズ

私の森語り（もりかたり）

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に挑戦されている方の取組を紹介します。

「森と人をつなぐ、思いを届ける架け橋に」



2026 ミス日本
みどりの大使
永田（ながた）　愛実（まなみ）

■自己紹介

皆さん、こんにちは。

二〇二六ミス日本みどりの大使の永田愛実です。

長崎県長崎市の出身で、幼い頃から父と一緒に近くの山に登るなど、自然豊かな環境で育ちました。高校時代は、長崎高校野球イメージガールを務め、夏は毎日のように球場に足を運び、球児へのインタビューや生放送番組を担当しました。選手たちの声を直接聞くことで、試合の結果だけでは分からない努力や思いがあることを知り、現場に足を運び、話を聞く大切さを学びました。また、平和活動の中で足繁く通った被爆クスノキ。原爆の被害を受けても力強く枝葉を広げる姿に、緑の持つ生命力を感じました。木はただそこに生えているだけではなく、その土地の歴史や人々の記憶を、未来へと伝えてくれる存在なのだと感じています。

■活動内容

みどりの大使に就任してから、全国各地の森林や林業の現場を訪れ、働く方々のお話を伺う機会が増えました。就任して間もない頃、苗木生産の現場を訪れました。長年仕事を続けている方から「毎年チャレンジで、毎年一年生」という言葉を聞きました。天候や気温、雨の量によって苗木の育ち方は変わるため、経験を重ねても毎年が新たな挑戦なのだそうです。その言葉から、自然と向き合う仕事の難しさと、何十年も先の森を見据えて働く皆様の責任と誇りを感じました。



苗木生産の現場での一コマ

また、特に忘れられないのは、レポーターを務める番組「ＭＯＫＵストーリー」の取材で訪れた石川県輪島市です。能登半島地震と奥能登豪雨から約二年半が経った輪島では、復興が進む一方、被害の爪痕が残る場所もありました。仮設住宅での暮らしが続く方々から現地のお話を聞き、災害が生活に与えた影響を身近に感じました。

林業に携わる方々からは、林業の現場も大きな被害を受けたけれど、まずは自分たちの生活を立て直すこと自体が大変だったと伺いました。地震で道路が寸断され、倒木や土砂で通行が困難になった場所もあったそうです。そうした現場で、重機やチェンソーを利用して倒木を取り除いたり、道を切り開いたりして、地域の復旧を支える力になったと聞きました。

私はそれまで、林業は木を育て、伐り、木材として暮らしに届ける仕事というイメージを持っていました。しかし、木を扱うために培った技術が、災害時には困難な状況にある人々の暮らしを支え、地域の復旧に役立っていることを知り、林業の持つ力の素晴らしさに改めて気づきました。

こうした経験を通して、現場には仕事の工夫や苦労だけでなく、働く方々の誇りや使命、一人ひとりの思いがあることを知りました。直接お話を伺うことで、初めて気づけることがたくさんありました。

そして、現場で得た気づきを自分の中だけにとどめず、多くの人に伝えることも、みどりの大使としての大切な役割だと考えています。この一年間で学んだ、木が暮らしに届くまでの背景や森を守る方々の思いを、これからも自分の人生を通して言葉で届けていきたいと思います

■メッセージ

長崎で父と歩いた山の景色も、被爆クスノキも、全国の森林で出会った方々の言葉も、私に自然と人とのつながりを教えてくれました。

これからも現場に足を運び、そこで出会う方々の思いや仕事への姿勢を自分の言葉で伝えながら、豊かな緑を次の世代へつないでいきたいと思います。

■連絡先

（一社）ミス日本協会
〒一六〇－〇〇二三
東京都新宿区西新宿二－二－一
京王プラザホテル南館九階

「MOKU ストーリー」の取材で訪れた石川県輪島市
　仮設住宅が並ぶ輪島市門前町浦上の高台で、「アテの元祖」と呼ばれる 2 本の能登ヒバについて説明いただきました。樹高は約30m、幹回りは4m以上もあるそうです。
　アテ林業を次世代へ継承していくため、浦上公民館の近くにアテの苗畑があります。仮設住宅に暮らすみなさんがここで苗木を育てておられ、苗木つくりは集いの場にもなっているそうです。





建築家の隈研吾氏((一社)more　trees 代表理事)と
　令和 8 年 6 月 3 日、輪島市・能登森林組合・(一社)more　trees の3者による、能登の創造的復興に向けた「能登・ふるさと共創の森づくり」協定の締結式が行われ、進行役を務めました。
　この協定は輪島市のアテ林業を持続可能な形で次世代へ継承するとともに、能登ヒバの活用促進や高付加価値化などを進め、震災からの創造的復興を目指しています。



「MOKU ストーリー」の取材で訪れた石川県輪島市
　能登森林組合の方から、重機やチェンソーを利用して倒木を取り除いたり、道を切り開いたりして、地域の復旧に携わったことを伺いました。
　木を扱うために培った技術が、災害時には困難な状況にある人々の暮らしを支え、地域の復旧に役立っていることを知り、林業の持つ力の素晴らしさに改めて気づきました。

山梨県の苗木生産現場を視察
　生産業者の方から「毎年チャレンジで、毎年1年生」という言葉を聞きました。天候や気温、雨の量によって苗木の育ち方は変わるため、経験を重ねても毎年が新たな挑戦なのだそうです。自然と向き合う仕事の難しさを感じました。



　みどりの大使の永田さんが、全国各地を訪問し、緑の大切さを発信する様子は、林野庁が発行する情報誌「林野」に紹介されています。　こちら
　↓

